

# 上杉家伝来鎧下着・着込み・頭巾等四領二個 下

伝上杉謙信・上杉景勝所用服飾類調査報告 六

神 谷 榮 子

## (2) 伝景勝所用紅縮緬鎧下着

(図版 I、二九一号図版 III b、挿図 1、6、7)

すでに概要(美術研究二九一号掲載「上」)において述べたように、この紅縮緬鎧下着は紺麻地鍔繫ぎ矢車文鎧下着と大きさも形態も殆ど同様で、且つ景勝所用と伝えられている点も同じである。ただこちらは綿入

れで、裏裂には紅染の麻が用い

られていて無双仕立ではない。

また裏は袖附の縫目があるが、

表は袖附の縫目がなく、身頃と

袖は一幅の裂からとつてある。

更にこの表裂の縮緬に関して

は次のことが考察される。縮緬

は金欄・紗・紋紗・金紋紗・緞

子とともに、わが国では天正年

間に明様の織法が伝来し製織されたのが始めだといわれているので、こ

の鎧下着が景勝が少年時代のもの<sup>註21、33</sup>、即ち永禄末から元亀年間頃のもので

あるということになるとわが国で製織される以前で、明からの輸入品と

なり、現在のところ、わが国最古の縮緬の遺品資料である。後染の紅縮

緬で、この場合、保存条件が良好であったため通常は褪色の著しい紅が

極めてよく色を留めている<sup>註22</sup>。ただ染めむらがあり、縮緬の地質は上質と

は言い難い。

この鎧下着の紅染に関しては、調査・研究に御協力願っている紅染研

究家の鈴木孝男氏の調査推定事項を次に紹介させていただく。

### 紅縮緬鎧下着の紅染

表裂の紅縮緬 7.5 R 5/12

裏裂の紅麻 10 R 6/10<sup>註11</sup>

紅縮緬(表裂)の方は、かなり黄味が入った帯黄色の紅(緋)色で、黄色の下

挿図 6 紅縮緬鎧下着 (2) 山形 上杉神社蔵

染が施された上に紅染した、即ちこの場合は、黄、次に紅の二浴（二回の浸染）から成った紅色と考えられる。帯黄色の紅色には、紅花餅<sup>註24</sup>に含有する水溶性の黄色素を完全に溶出ししないで紅染したのもあるが、この鑑下着の紅縮緬は黄色の下染が予めなされている様相が処々に認められる。紅花餅に含有する水溶性の黄色素を完全に溶出ししないで紅染した帯黄色の紅色の場合は全体的な褪色が認められるのであるが、この鑑下着にはそれがなく、襟の部分に紅の分解の性格が見られる外は摩擦による褪色、この場合は摩擦の多かった個所は紅が剥落し、下染の黄が現われている。

紅は顔料系で、一たん発色すると顔料の性質になり摩擦に合うと剥落する。

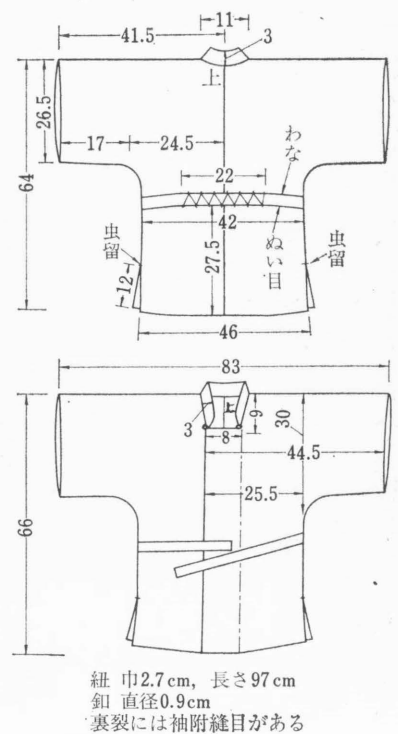
この鑑下着は裂地が縮緬であるため濡れると著しく縮み<sup>註25</sup>、しかもこの場合は紅が濃い（現状から推測すると恐らく当初は深紅であったと思われる）のでますます裂地に浸透しにくくなり、拡大鏡で観察すると表面附着の感が如実にあらわれている。黄の下染があるので、おのずからそれと比較され、紅の顔料の性格がまことによく見られるが、純度が高く、そして濃い紅が、黄に染まった繊維の表面に附着している感じが強い。即ち何かの黄色染料で浸染の下染をし、その後、純度の高い濃い紅に浸染したものである。

裏の紅麻は、麻の場合は純粋のものしか布に着かないのでこの裏裂も純度が高い。

以上の推定は褪色実験における紅の色相変化と符合させて考察した。

鈴木孝男

右の鈴木孝男氏の考察で、紅縮緬の染めむらと思われたものは実は摩擦の多かった個所の紅の剥落であったことが明らかになった。摩擦による剥落の多い個所は、両胸下方、それも左（向って右）胸の脇に寄った部分がこの鑑下着の中でも特に目立って、また、な黄色になっており、即ち



挿図7 紅縮緬鑑下着(2)実測図  
-----は下前

紅の剥落で下染の黄色がまだらに露呈しており、次に両肩山・袖山附近、左袖の正面袖口に近い部分、襟は総体に、そして背中あたりになっている。これはとりもなおさず、鑑下着として用いられた際に、具足の裏面（内側）と接触し、摩擦の多かった順序とも一致するように思われる。なお、裏裂の紅麻に、丁度背中に当たるところに四ヶ所、明らかに発汗のしみあとの形で紅の色が褪せて薄くなった個所があり、この摩擦の状態と合わせ、如何にも実戦に供せられたであろう鑑下着の痕跡が生々しい。

(形状、法量、仕立て方)

形状、法量は一覽表の(2)〔上〕掲載の表1—美術研究二九二号(二頁)—と挿図7の実測図に示した。(1)の紺麻地銀繫ぎ矢車文鑑下着と大きさ、形態が殆ど同じで、景勝所用と伝えられている点も同じ、ただ仕立の上から次に挙げるような大差、比較的目立つ差、精査の上でわかるような小差の諸点がある。

先ず大差では、(1)紺麻地銀繫ぎ矢車文鑑下着は袷で、更に、裏にも表裂

が使われている無双仕立であるが、この(2)紅縮緬鍔下着は綿入れて、裏は表とは別裂の紅麻が用いてあること。

次に比較的目立つ差では(1)には袖附の縫目があるが、(2)には裏の麻裂には袖附の縫目はあるものの表の縮緬の方にはなく、身頃と袖は一幅の裂からとってあること。

最後の、精査の結果判明する小差は、その一つに、襟は(1)と(2)は同じ形で、図版I、二九一号図版I、挿図1、4、6で見られるように、襟首には左右にくるみ釦がついており、共裂の乳、即ちループに通してとめるようになっているが、(1)の乳は共裂を擦って糊で固めてあり、(2)の乳は現今の乳と同様の通常の仕立て方の乳で、一枚の細長く裁断した小裂を二枚に折りたたみ、くけ合わせてある。といったものがある。この小差に関して、一々をここで比較せず、主として(2)の詳述を行い、すでに「上」(美術研究二九一号)に於いて詳述した(1)との照合比較を適宜行えるような便法をとりたいと考える。

背縫の折被せは表裏とも今日でいう正常な方が上(美術研究二二八号二〇頁、挿図3参照)になっている。

裾脇明けは両脇とも前は左右とも十二・五センチ、背面は左右とも十三センチ裾から上方までで、その位置に薄紅色絹糸で虫留せむどがしてある。袖口(平袖であるが)は、表裂の紅縮緬が裏へ一・七センチ前後返っている。折被せは裏裂の紅麻が上側。袖口以外の表裂と裏裂の縫い合わせ部分即ち前身頃・後身頃の裾、前合わせの上前・下前、裾脇明けは突き合わせに縫い合わせてある。袖口、裾などに屢々見られる衤の綿おさえ(ふきとじ)のめ糸はこの綿入の紅縮緬鍔下着には何処にも行われていないようである。袖口の縫い合わせ目と前身頃の打ち合わせ部分の端を、それは何れも縫代の端であって表裂と裏裂の間に縫い込まれている部分であるので縫目の間から針を入れて一部引き出して観察したところ、その何れの端も織耳であ

った。即ち、このわが国最古の遺品資料である縮緬の裂幅が判明したのである。この鍔下着の正面、袖口から打合わせの端までは一幅の裂で出来ており、裂幅はその幅に袖口の裏への折返えり一・七センチと両端の縫代として一センチの二倍を加えれば出てくる。こうして計出された裂幅は四八センチ前後となる。

襟は(1)紺麻地銀繫ぎ矢車文鍔下着と同じ形であることはすでに述べたところであるが、これら(1)(2)の曲線裁ちの襟は、一枚の裂が二つ折りにしてその両端を端から六・五センチ間つまんで丸みを出してある。襟首の釦留は(1)と同様、左右に直径〇・九センチ、厚み〇・五センチの共裂のくるみ釦がついていて、共裂の乳に通して留めるようになっていた。この乳は前述したように今日の羽織の乳と同様の作りになっており、わなが上、くけ目が下につけてある(図版I、挿図1「上」、美術研究二九一号三二頁)。

幅二・八センチ、全長九七センチの表裂と共の紐が、後から前にまわして結ぶ方式で背面にくけつけてある(美術研究二九一号図版III)。わなが上、縫目が下につけてあること、その紐には白木綿の芯裂が(1)と同様な方法で入っている(挿図7、「上」、美術研究二九一号三六頁下段参照)ことは(1)紺麻地銀繫ぎ矢車文鍔下着と殆ど同一といえる。背面の背紐つけには、くけつけた上を挿図7に示したように礪色S撚絹糸二本どりで、鍔下着の裏側には糸が出ないようにして(1)は裏側にも糸が出るようにしてある)飾り縫が施してある。(1)の場合、この飾り縫は挿図5(「上」美術研究二九一号三六頁照合)に示したように、飾り糸を単に掛け合わせただけで進行しているが、この(2)の場合は(1)のように掛け合わせた後、すべての個所で更に糸をからませて飾り糸を動かぬようにしてある。そのからませ方、留め方は詳細に当たったところ一定の法式はなく、いわば適当に飾り糸をからませて動かぬようにし、進行したものと考察された。

縫糸は紅染の赤S撚絹糸で、縫目は二枚合わせの平縫が〇・二センチか

ら〇・三センチ、くけ目が〇・七センチから〇・八センチ、背紐つけのくけ目が約一センチの針目となっている。

(表裂 図版 I 参照)

後染の紅縮緬で、黄色の下染の後、紅染を行ったものと考察される。褪色の著しい紅としては色をよく留めている。紅染に関する鈴木孝男氏の考察、並びに摩擦による紅の剝落状態は前述した。縮緬の生地は織り目も整っておらず、比較的薄手ではあり上質とはいえないが、わが国最古の縮緬の遺品資料として極めて貴重である。二越の縮緬で、緯糸はS撚とZ撚の強撚糸が二越ずつ交互に入っており、密度は一センチ間に、経糸は四四本前後、緯糸は二四越前後である。裂幅は前述したように四八センチ前後である。

(裏裂 図版 I 参照)

後染の紅麻で、苧麻である。表裂の紅縮緬同様、褪色の著しい紅染の遺品としては極めてよく色を留めている貴重な資料である。紅染に関する鈴木孝男氏の考察、並びに背中に当る部分の発汗によるしみ、あとは前述した。苧麻の裂地としては上質で、密度は一センチ間に、経糸は二六本前後、緯糸は二四越前後である。

(背紐の芯裂)

恐らく(1)紺麻地鑢繋ぎ矢車文鑑下着の背紐の芯裂と同質のものである。この(2)紅縮緬鑑下着には紐にもほころびの個所がなく、くけ目の間から針を用いて、芯裂の色、地質、芯裂としての納まり方を観察したにすぎないので、密度までは判明しなかったが、(1)の背紐芯裂と同質の白木綿と考察された(「上」、美術研究二九一号三六・三七頁参照)。

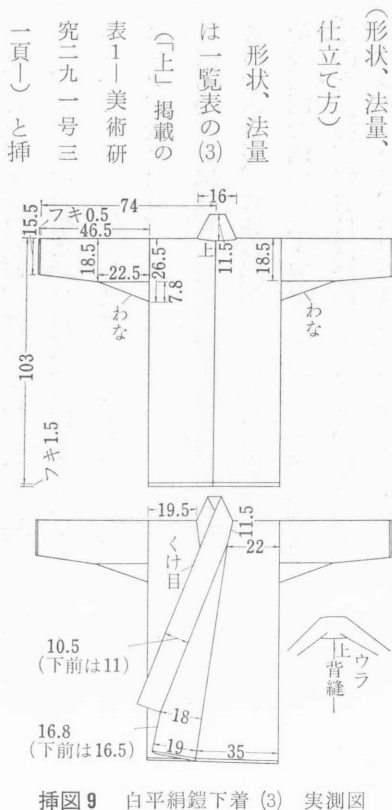
(3) 伝謙信所用白平絹鑑下着 (挿図8、9)

節織の白平絹で作られた綿入れの鑑下着で、挿図8で見られるように

袖に三角の襠裂まちが入った筒袖である。袖の形と丈が短いこと以外は、その時代の小袖と殆ど変わらない。小袖との比較では拙稿「伝上杉謙信所用小袖十二領―伝上杉謙信・上杉景勝所用服飾類調査報告二―」(美術研究二二八号)を参照されたい。

實用本位のものと言えよう。

挿図8 白平絹鑑下着 (3) 山形 上杉神社蔵



挿図9 白平絹鑑下着 (3) 実測図

言つてよい程で、損傷は、左肩の襟附から約六センチの位置に、長径約一・五センチ、短径約〇・八センチの破損、上前の衿の裏側に剣先から約四二センチ下った位置に長径約二・五センチ、短径約一・五センチの破損の跡と、下前の裾の裏側に、長径約八センチ、短径約五センチの大きな破損と直径が約〇・八センチから一・五センチの小さな破損がかたまつて三つある位で、その他は保守状態のよい鎧下着である。

綿は比較的厚く入っており、袖口、裾ともに施があり、袖口の施は約〇・五センチ、裾の施は前裾は一センチ前後の個所が多いが、背面の背縫下の裾は一・五センチある。襷先は尖っている。背縫の折被せは表裏ともわかれがいう正しい方向（美術研究二二八号二〇頁、挿図3参照）になっている。即ち挿図9の実測図に示したように「上」と記入してある側が高くなっている。襟のくけ目の側（挿図9参照）には表襟に綿がふくませてあり、裏襟がくけつけてある。裾には綿のとはじはないが、袖口には、内側三・三センチのところに、袖口綿のとはじ糸が、約三センチ間隔に白S撚絹糸で〇・一センチから〇・二センチの針目で見られる。

縫糸は比較的細い白S撚絹糸で、縫目は、平縫は約〇・二センチの針目が揃っており、くけ目は約一センチの針目が揃っている。

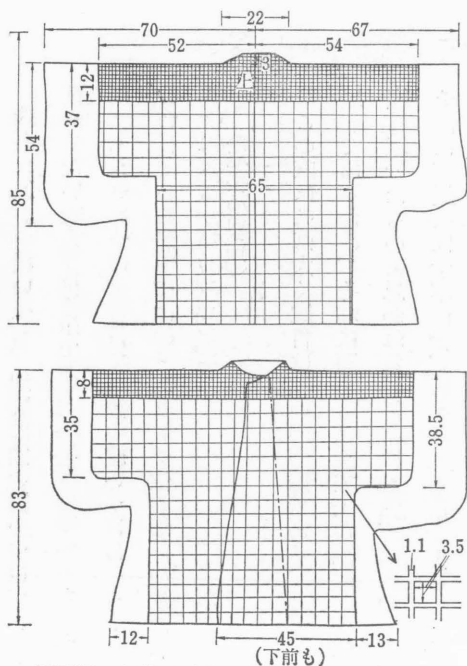
(裂地)

表と裏とは共裂で、緯糸に節糸が用いられている。経糸も比較的太目で、緯糸よりやや細目と思われる程度。密度は一センチ間に、経糸は三二本前後、緯糸は二五越前後である。

(4) 伝謙信所用鎖帷子 (図版II、挿図10、11)

(6) の鎖頭巾と共に実戦用衣料で、具足の下に着込んだものである。黒

上杉家伝来鎧下着・着込み・頭巾等四領二個 下



挿図10 鎖帷子(4) 背面 山形 上杉神社蔵

では腕や胴を隙間なく鎖が被つていて防禦の役を果すように、三・五センチ四方の間隙をこしらえて並べてある(挿図11)。更に袖下、両脇は縫い合わせてなく、地裂の麻も裁ち放しになっているのは、着込む時の調節や実戦時の身体の動きが自由であるようにとの考慮からである。何分三・九キロという鎖のついで

麻地に鎖が縫いつけてあり、鎖の置き方は、図版II、挿図10、11で見られるように肩山や袖山など着装時に襷を取ったり皺が寄ったりしない箇所、即ち裂が延びたままの状態であるところには鎖が隙間なくベタに並べてあり、袖の袖下や脇に着込む箇所、身頃の胸、背、脇など、襷をと

た重い衣類を着込み、実戦に臨むのであるから、生身の防禦は充分に果した上、如何に着やすく動きやすくするか、機能

の上での計算が精密になされているように思われる。

(形状、法量、仕立て方)

形状、法量は一覧表の(4)〔上掲表の表1—美術研究二九一号三二頁—〕と挿図11の実測図に示した。破損箇所は図版II、挿図10で見られるように大小合わせて十数ヶ所あるが、正面の右側(向って左側)に大きい破損が比較的集中して見受けられる。何れも鎖は無傷で地裂のみの損傷である。地裂は苧麻糸の太い糸で織った麻裂で、一重である。先ず地裂の背縫、袖附、襟附(これらの縫い合わせは何れも通常の縫い合わせと異って紙類の貼り合わせのように左右の裂を平に重ね合わせ、その上から大きい針目を表と裏に出して綴じてある。針目は一センチから二・五センチの不揃いの大きい針目で、図版II、挿図10で見られる通りである。)を行い、それに鎖を縫いつけ、その後で袖口、袖下、両脇の鎖のない部分の裂を縫いつけている(この縫いつけも、前述の背縫、袖附、襟附同様に貼り合わせ式の重ね縫いである)。この鎖のない部分の裂は、鎖帷子全体から眺めると恰も魚の鱗のようで、裂の端はまつたり、くけたりしない裁ち放しである。この鱗のような部分は、恐らく重い鎖の部分を固定させておくための役目を持った裂であろう。実戦のはげしい動作にも、重い鎖がずれたり片寄ったりせずに満遍なく身体に覆い被さっているように考えられた身体に巻きつけるように着込まれた部分であったろう。そのため袖下縫、脇縫はせず、裂の縫い合わせも貼り合せのようにして裂の重りが二重でとどまるように考慮し、端も裁ち放しで、あくまでも平に(ゴロゴロせず)胴体や腕になじみやすくしてあるのだと考えられる。背縫、袖附、襟附に行われている貼り合わせ式の重ね縫いも、いささかでも身体に平に当るよう配慮されたものであったろう。具足と鎧下着の間に挟んで着装する防護服として周到な思慮が考じられている点、特に驚歎させられる。

縫糸は地裂の縫い糸も、地裂に鎖を縫いつけてある糸も共糸で、Z撚の晒してない麻(苧麻)糸である。地裂の重ね合わせ縫いの針目は一センチから二・五センチの大針目で、鎖の縫いつけは一センチから二センチ間隔で行われているが中には〇・八センチ位の間隔の箇所もある。

(地裂の裂地)

この麻は糸が大きく織目は粗いが苧麻である。重量のある鎖を縫いつける地裂であるため、それに適するよう丈夫な繊維の苧麻を太糸にして粗く平織に織ったものと思われる。経糸はS撚、緯糸の撚は不詳、密度は一センチ間に、経糸は十本前後、緯糸は八越前後である。後染の黒である。

(袖口、袖下、両脇の裂地)

鎖の縫いつけてない部分の裂地で、鎖の縫いつけてある地裂と同様に苧麻の平織で、後染の黒であるが織目が密である。経糸、緯糸共にS撚で、密度は一センチ間に、経糸は十六本前後、緯糸は十四越前後である。

(5) 伝謙信所用烏帽子形白綾頭巾(図版III、IV a、挿図12)

図版III aは斜め前、bは背面である。松竹梅が地文の白綾製で、総角は赤である。図版でも見られるように形としては烏帽子というよりも桃山時代の風俗画、例えば狩野長信筆の花下遊楽図などに、女が長い布で頭を筒形に巻いている形に似ている。

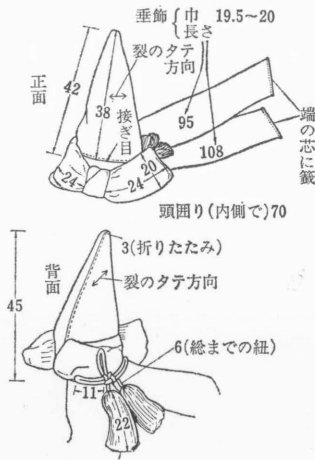
尖った烏帽子形部分の高さが四二センチ(背面の高さ、正面は五五センチある。)もあり、その形に合わせて中に籤を粗く編んだ竹籠のようなものが入れている。尾を引いたように長く垂れている二枚の裂は、正面の蝶結び風な飾りから続いている裂で、幅は約二〇センチ、垂れの長さは

左右ともほぼ一メートル、実に派手やかな白頭巾で、これを通して連想されるのは、昔から川中島合戦の図というと必ず現われてくる白布で頭を包んだ謙信の姿で、実際にはこの白綾頭巾をどのように用いたものか詳かでないが何とも興深い遺品である。

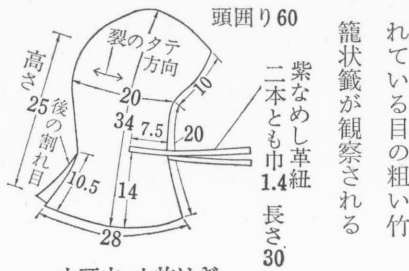
(形状、法量、仕立て方)

形状、法量は一覽表の(5)〔上〕掲載の表2—美術研究二九一号三一頁—と挿図12の実測図に示した。破損箇所は図版Ⅲで見られるように前頭部に大小四ヶ所、左側面に比較的大きく一ヶ所、烏帽子形の尖端に一ヶ所と何れも摩擦に原因するようなすり切れの損傷があり、垂れ飾りの先端には二本とも巻き込んである籤が突き出ている小さな破損がある位で、汚れも殆どなく良好な保存状態である。

ただ烏帽子形部分に入れてある竹籠状の籤には内側から白い和紙が全面に当ててあった(即ち当初は表の白綾と裏の白和紙の間に籤が入っていた)痕跡が明らかで、その和紙は現在では殆どが破損しており、ごく僅かの部分だけが籤を覆っている。そのため烏帽子形の裏、即ち内側から、中に入ら



挿図12 烏帽子形白綾頭巾(5) 実測図



挿図13 鎖頭巾(6) 附属の中頭巾実測図

れている目の粗い竹籠状籤が観察される。二本とも巾長さ30

と云っても過言ではないほど形を整えるための留が行われており、留の糸の切れた部分でもあれば精査は更に進められるのであるがそれもかなわない状態である。正面の蝶結び風な飾りの部分には、張りをもたせるために芯として和紙らしいものが入っている(調査は裂の上からの触感と針を刺しての感覚で行った)。

頭巾からは籤の頭巾部分の内側が七〇センチあり、謙信の他の頭巾から推測する〔上〕掲載の表2—美術研究二九一号三一頁—と

のである。籤は二本の垂れ飾りの先端にも裂を張らせるために巻き込まれている。

烏帽子形部分の白綾は横裂が使っている。即ち烏帽子形の高さに裂幅を当ててある。その尖端は三センチ間を折り畳んで始末しており、あとは円錐形を左脇後方の縫目(押え縫い、〇・二・〇・三センチの針目)で形作っている。正面の結び目よりやや上方に裂の接ぎ目があり、〇・一五センチ前後の細かい針目で押え縫いがしてある。烏帽子形部分の横裂に接ぎ合わされたこの裂は前の蝶結び風な飾りから後方へまわり二本の垂れ飾りとなる一続きの裂の一部と思われるが、結び飾りの数ヶ所の留めに遮られて詳らかにならない。

正面の蝶結び風な飾りは側面から背面にまわり、後頭部で適当に整えられて、その部分に紅染角打紐の総角がつけられ、そして二本の長い垂れ飾り(右側九五センチ、左側一〇八センチ)となっている。この一続きの長い裂は、一幅の裂を二つ折りにしてあり、二つ折りにした幅が一九・五〜二〇センチとなっている。二つ折りの部分はこの頭巾の場合、耳の側は両耳を合わせ縫って表にかえし、その上から一・五ミリ前後の細かい針目の平縫で上から押さえ縫いしてある。蝶結び風の正面の飾りも、側面にまわった個所も、背面の総角の下になっている部分も、この一続きの裂は処々に丹念

じかに被る頭巾より十二、三センチ大きいので、鎖頭巾とか兜の上に被ったものであることが想定される。

縫糸は白Z撚絹糸で、縫目は押え縫の平縫が多く用いられており、針目は細かく、烏帽子形部分の縫目が○・二〇・三センチ、後は○・一五センチ前後である。

(裂地)

松竹梅が地文の白綾で、文丈は七センチの個所が多いが、打ち込みのゆ<sup>註27</sup>るい個所もあって七・五センチのところもある。窠間幅は八センチ前後、<sup>註26</sup>窠間幅は八センチ前後、五窠間である。組織は地は経の六枚綾で(右上り)、文は緯の六枚綾で(左上り)、密後は一センチ間に、経糸は四八本前後、緯糸は三〇越前後である。裂幅は四〇センチ前後。

(総角の紐)

一辺が約一センチの角打ちの紐で、紅染の糸で組んである。紐や総の外側(表面)が褪色しているが内側は紅の鮮やかさを保っている。

(6) 伝謙信所用鎖頭巾(図版IV b、挿図13)

鎖帷子同様に実戦用の頭巾で、兜や前出の烏帽子形白綾頭巾(5)のような頭巾の下に被ったものである。この鎖頭巾は表面は黒繻子であるが黒染が鉄媒染であったため朽損<sup>註28</sup>しているので、本来ならば黒繻子の下にあつて見えない筈の綿(真綿)や鎖、鎖を縫いつけた地裂の麻が図版でも見られるように露出している。鎖は鎖帷子(4)の肩山や袖山などと同様、隙間なく地裂に縫いつけてある。頭から首にかけて襷も皺も寄せないですっぽり被るように作つてある頭巾であるから、このように全

体にベタに鎖を縫いつけてあつて至当であろう。この地裂の麻は染めてもなく晒してもない茶色の麻(芋麻)で、表の黒繻子とこの鎖の縫いつけてある麻裂との間には綿が入っている。

なお、この頭巾には一番内側に、頭囲り五八センチ、深さ二一センチの黒繻子丸形頭巾を被るようになっていて、図版で正面の額の部分に見えるのがその頭巾の一部である。この丸形頭巾は頭に密着するような形で、六センチ幅の縁取が額から後頭部にかけて鉢巻のように囲っている。中には和紙の芯が入っており、裏は節織の浅葱平絹である。重量は中の丸形頭巾も共で七六〇グラムとかなり重い。紙芯の入った中頭巾を先ず被り、次に、鎖が間隙なく縫いつけてある麻裂と真綿の二重の層を持つ黒繻子の鎖頭巾をいただし、その上に兜の類をつけるといった頭部を護るに周到的武装が、先の鎖帷子を着込んだ胴体の武装の堅固さと共にたのもししい感じを抱かせる。

(形状、法量、仕立て方)

形状、法量は一覧表の(6)〔上〕掲載の表2―美術研究二九一号三一頁―と挿図13の実測図に示した。現状は表裂の黒繻子が殆ど形をとどめないまでに朽損し、そのすぐ下層の綿の層も破損乃至は片寄りの状態で、そのため更に一段下層の鎖とその鎖が縫いつけてある麻裂が露呈している。

後の中央が○・五センチ割っており、前には幅一・四センチ、長さ三〇センチの紫なめし革の紐が左右につけてある。

鎖は地裂に縦、横ともに二センチ間隔位で縫いつけてあるが、その縫附けてある糸は直径が○・二センチもある細紐とも言えるような太い晒してないZ撚木綿糸である。麻の部分の縫糸(縁の縫代を押し縫いした部分に見ら



れる)は、晒していないZ撚麻糸で、約三・五センチ幅の縁の縫代は、一センチ前後と〇・三センチ前後の大小交互の針目で押え縫いが行われている。表裂の黒縞子部分の縫糸は萌黄Z撚絹糸で、その黒縞子裂の接ぎ合わせらしい縫目に〇・二センチ前後の平縫の針目が見られる。

鎖頭巾の下に被る中頭巾も表裂が黒縞子であるので損傷が著しいが、鎖頭巾の表裂に比較すれば残存部分もはるかに多い。経文のような文字が書き込まれている紙の芯が二重になって入り、額から後頭部にかけては鉢巻状の裂が囲り、頭に密着するような形の頭頂部分は六枚はぎになっている。六枚はぎの縫い合わせはくけ目であろうか、<sup>註29</sup>一・三センチ〜一・八センチの大きい針目である。その他の部分の縫目は、平縫が〇・二〜〇・三センチ、くけ目が一・二〜一・三センチの針目となっている。縫糸は浅葱Z撚絹糸が用いてある。

#### (鎖頭巾の裂地)

表裂の黒縞子——五枚経縞子のようなものであるが、その他は損傷が甚だしく不詳である。

鎖の縫いつけてある地裂——晒していない麻で苧麻の裂である。従って色は苧麻の自然色で薄茶色、粗い織目の平織で、経糸はS撚、緯糸は経糸よりやや太く、撚は不詳。密度は一センチ間に経糸は一三本前後、緯糸は一越前後である。

#### (中頭巾の裂地)

表裂の黒縞子——Z撚経糸の五枚経縞子で、密度は一センチ間に、経糸は一〇〇本〜一一〇本位、緯糸は三六越前後である。

裏裂の薄浅葱平絹——後染の薄浅葱平絹で、節糸を使ってある節織である

上杉家伝来鎧下着・着込み・頭巾等四領二個 下

る。密度は一センチ間に、経糸は二四本前後、緯糸は二二越前後である。

#### 四 むすび

以上で上杉家伝来の武装服飾中すでに美術研究二八六号に於て報告発表済みの陣羽織を除く六点、即ち鎧下着・着込み・頭巾等四領二個の調査を了え、それぞれに武装服飾としての得難い貴重な資料であることを確認したのであるが、中には景勝所用として伝えられている二領の鎧下着のように、一領は多色型染として、他の一領は縮緬として、共にわが国最古の遺品資料であるといった染織史上特筆すべき事項も含まれているのであった。

その二つの事項、即ち多色型染と縮緬、加えて鎧下着であるといった三面から、年代は多少下るが恰好の対照資料の優品があるので、ここに紹介したいと考える。

それは東照宮御譲りとして尾州・徳川家に伝来した徳川黎明会所蔵、徳川美術館保管の「黄縮緬根芹雪輪小紋拾」で、調査は下前任附の縫目が一メートル前後ほころびていた昔日に一度と、ほころび部分も繕われていた今回との計二度に互った精査である。調査に際し一方ならず御世話になった徳川黎明会の徳川義宣専務理事、並びに徳川美術館の熊沢五六館長ほか学芸員諸氏の御好意と御協力を深謝し報告に入りたいと思う。なお、この衣料の呼称は徳川黎明会の名称であり、掲載写真(図版V)は同会原板の焼付である。

東照宮御譲 黄縮緬根芹雪輪小紋袷 (図版V、挿図14、15)

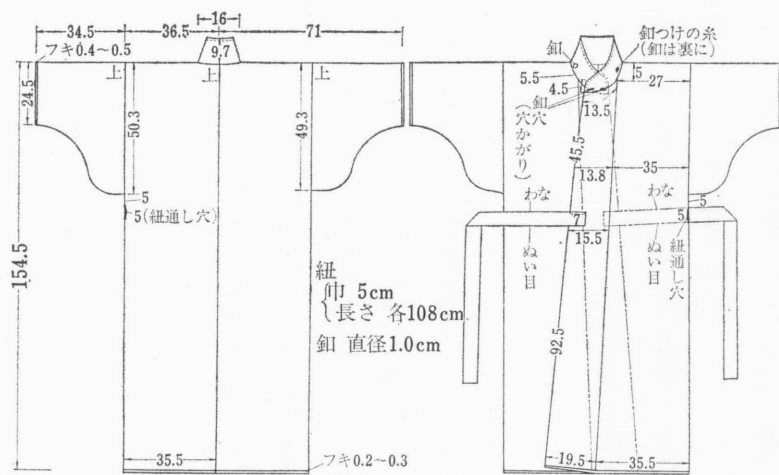
輪散らしに雪輪を置き、その上に根芹がそれぞれ勝手な方を向きながらも恰も互の目に並んでいるかのようにはバランスよく配されている。生気に溢れた根芹の図様、芹の花の扱いと散らし方、それらを巧みに雪輪に組み立てリズムミカルに四方に進行させているこの連続文様は文様としても傑作である。

橙がかかった黄色地に、藍、薄藍、茶色の三色で文様があらわされている。上杉家伝来の伝景勝所用紺麻地鍔繁ぎ矢車文鍔下着(本稿の(1)、美術研究二九一号掲載の「上」参照)と同様、形染で多色染が行ってある。現在のところ、室町から桃山、江戸初頭にかけての型染遺品資料で多色染が行っているのはこの二点だけで、その意味でも極めて貴重な資料だと言える。

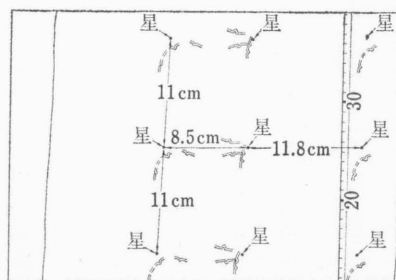
(観察並びに推測染色法)

前述したように初回の調査時には下前衿附の縫目がほころびたままの状態であったので、裂地の裏面も観察でき、そのため染色、仕立て方など解明点が多かった。

表からの観察——地は橙色がかかった黄色で、雪輪と芹の茎は赤味の多い茶色、芹の根は茶色と薄藍、芹の葉は薄藍と藍が約半々位の割合で、芹の花の大きい方は輪郭と中心の点が茶色で花弁内の点が藍になっており、芹の花の小さい方は薄藍となっている。この場合、薄藍は黄色地に重ねてあるので緑に見える。これらを色別にと次のようになる。



挿図15 黄縮緬根芹雪輪小紋袷実測図 ----- は下前



挿図14 黄縮緬根芹雪輪文型染「星」説明図 (図版V b 照合)

茶色(赤茶)——雪輪、芹の茎、芹の根、大きい花の輪郭と中心の点  
薄藍(緑に見える)——芹の葉、芹の根、小さい花

藍——芹の葉、大きい花の花弁内の点  
型紙の星は挿図14に示したように、一幅に三個ずつ(間隔は、向って左から八・五センチ、一一・八センチ)、縦一一センチの間隔で見られる。星は茶色の上に薄藍、藍と色が重なっているので型付がその順で行われたことが知られる。即ち地染の黄色の上に茶色、薄藍、藍の順で摺染したことが観察される。この中、茶色部分の文様は型紙を二枚は必要とするから、この文様の型付は三色で最小四枚の摺型を使っている。

裏からの観察——裏面は表の地色の黄と同一の濃度で(現状は表は褪色が幾らかあって茶っぽく見えるが裏は鮮やかな黄色である)あるからこの地染は引染めでなく浸染であることが明らかである。更に裏は黄色無地であるからこの裂

の文様は、表からの観察と総合して次のような製作に成るものと考察される。

まず黄色の浸染で地染がなされ、次に表に型付によって文様がすべて摺染で行われる。型紙は一かえり一センチで、一幅に三個並んでいる口星で当って型が送られている。文様の色は三色で、茶(赤茶)、薄藍(黄色地上なので緑に見える)、藍の順に型付されているようである。型紙は茶色部分の文様に最小二枚は必要であるから最小四枚は使われている。型紙四、五枚を用いて型付した摺染の文様である。<sup>註11</sup>上杉家伝来の(1)紺麻地銀繫ぎ矢車文鍔下着の染色に用いられている糸目糊や伏糊の型付はこの場合はない。

#### (形状、法量、仕立て方)

形状、法量は挿図15の実測図に示したが、身丈が一五四・五センチと非常に長く、袖下の曲線が注目をひく袷仕立の衣服である。丈の長いのは具足の下に着込むものとして各人着心地その他の点で各様であったと思われるのでさして問題にもならないし、袖下の曲線は桃山から江戸の初頭にかけての鍔下着には名古屋城に所蔵されている織田信長所用の鍔下着二領(挿図16、17)とか水戸の徳川家に家康及び光圀所用として伝わる鍔下着数領にもこの種の袖の形が多く、別に特異なものではない。袂のある小袖の袖を具足の下に着込むに都合のよいよう袖口を筒袖のようにすると、その袖口と袂を結ぶ線がこのような曲線になる。名古屋城の信長所用の鍔下着や水戸の徳川家伝来の鍔下着は尾州の徳川家伝来のこれよりも曲線が多少ゆるいか、直線にしてあるかである。

かつては下前の衽附の縫目がほころびていたが現在は繕われているので、現状は破損巧損が殆ど見られず良好な保存状態である。

裏に紅の平絹が通し裏でつけてある袷仕立で、室町・桃山の袷仕立の大部分のものに見られる四つ縫は一ヶ所としてない。この四つ縫の調査は以前ほころびのある時代に、裏を見ることも出来て容易に各所に当たったが、背縫、脇縫、袖附、衽附、袖附と四つ縫可能な箇所は何れも表と裏は別々に縫い合わせてあって、後でとじつけてあった。

襟は上杉家伝来の鍔下着二領(1)(2)と同様な曲線裁ちの立襟であるが、襟も前の重りと同様に打ち合わせとなっており、表裂でくるんだくるみ釦の留めは乳(ループ)ではなく穴かがりされた釦穴である。釦は直径一センチ、厚み〇・五センチで上杉家伝来の二領のくるみ釦と大きさはほぼ同じであるが、こちらは釦の中央に表から裏に通る針の通る穴が開いているらしく、そこに穴糸のように太い薄紅色のS撚絹糸が表から裏に通っており、その部分は糸に締められて釦をくるんだ表裂がくぼんでいる。穴かがりは現代の穴かがりと同一方法のように観察された。襟の立ち上りの縁に、片面(外側)だけに針目が出て、平縫の飾り縫が施してある。紅色S撚絹糸で針目は〇・四センチ前後である。これは飾り縫か、必要な縫目か定かでないが、二枚の縮緬を襟の形に裁って縫い合わせてある縁回りの部分に、中に縫い込んである縫い代を定着させ、そうすることによって張りを持たない縮緬の襟の形を整えさせる必要性も多分にある縫目と考えられる。

上前、下前とも幅五・二センチ前後、長さ一〇八センチの表裂と共の附紐が、わなが上、縫目が下に衽にくけつけてある。そのくけつけの糸は黄色S撚絹糸二本どりで表裂だけにくけつけてある。附紐はその附け方と長さから考えても下前の紐は左脇にある紐通しの穴を通して表に出し、二本の紐を左右の脇から後にまわし、前に持って来て結んだものと思われる。

袖口、裾ともに衽があり、袖口の衽は〇・四センチから〇・五センチ、裾衽は〇・二センチ前後である。衽の尖端の袷先は剣先風に尖っている。

背縫の折被せは表裏ともわれわれがいう正しい方向(美術研究二二八号二〇

頁、挿図3参照) になつてゐる。即ち挿図15の実測図に示したように「上」と記入してある側が高くなつてゐる。

縫糸は、表裂と表裂の縫い合わせには当初は茶色S撚絹糸が用いられていたが、茶色の鉄媒染でその糸は巧損<sup>註28</sup>し、ほころびを生じたりしたようである。近年の繕いのための糸は色を替えて当初の糸とは区別してある。裏裂と裏裂の縫い合わせには紅色S撚絹糸が用いてあり、表裂と裏裂の縫い合わせにも紅色S撚絹糸が用いてある。表裂の縫代と裏裂の縫代のとじは白S撚絹糸で行われている。縫目は、平縫は〇・一五センチから〇・二センチの細かい針目で、くけ目は〇・四センチから〇・五センチの、くけ目としては細かい針目である。

このように総じて細かい針目の丁寧な仕立てのように見受けられるが、しかし処々に、室町・桃山頃の仕立ての特徴である鷹揚さ——例えば左右相称であるべき個所の寸法が多少違う場合が多いというような——や技術の幼稚さが見られる。

重量は四六五グラムで、大ぶりであるためか絹の袷としては重いようである。

(表裂 図版V参照)

前述したように橙がかつた黄色に浸染した縮緬に、赤味の多い茶色、薄藍(黄色地の上に薄藍を置いてあるので緑に見える)、藍の三色の摺染めで型紙は四枚以上(四、五枚カ)用いて雪輪に根芹の文様を表出している。文様は、縦の一かえり(織の文丈に相当する一リピート)が一センチ、横の一かえり(織の窠間幅に相当する一リピート)が二〇・三センチである。

縮緬の生地は上杉家伝来の紅縮緬鍔下着(2)に比較すれば織目も整っており、厚手であるが、上質とは言い難いであろう。二越の縮緬で、緯糸はS撚とZ撚の強撚糸が二越ずつ交互に入っており、密度は一センチ間

に、経糸は五二本前後、緯糸は三二越前後で、上杉家伝来の紅縮緬鍔下着の縮緬(一六頁照会)より多分に密である。裂幅は裏が観察できた時点の調査で、耳から耳までの個所は見当らず、片側が耳でも片側が裁ち目で、結局、最も裂の幅の広い個所の広さ以上ということでは三八センチ以上ということになった。上杉家伝来のが四八センチ前後(一六頁照会)であるから、この縮緬も四八センチ位はあったものかも知れない。

(裏裂)

後染の紅平絹で、経糸は緯糸に比較して細いが、緯糸の二分の一位の太さのや三分の二位の太さのと不揃いである。密度は一センチ間に、経糸が四六本前後、緯糸が四〇越前後である。

以上の調査で、徳川黎明会所蔵の東照宮御譲黄縮緬根芹雪輪小紋袷は、形状、法量、仕立て方、裂地等の立場からも近世初期の特徴が備わっており、また近年におけるほころびの繕い部分を除いては当初の状態をよく残している「うぶ」な遺品資料である。初期の縮緬、初期の多色型染としても数少い貴重な資料で、伝来がよく、且つ裂地に施された型染の文様も美術工芸的価値に優れ、総合して桃山末から江戸初頭にかけての得難い優品だと認められる。

さて、上杉家伝来の鍔下着・着込み・頭巾等四領二個の総括に移ろう。これら四領二個は、何れも疑う余地のない「うぶ」な武装服飾で、保存状態も良好に今日に残されている。

中でも鍔下着三領は保存状態が極めてよく、古様を備えた形態、多色型染、縮緬といった三点からは近世初期の服飾・染織の上で特に注目され

る。形態は西欧服飾の影響を襟の形や釦留め、ループ等部分的に受け入れてはいるが、やや時代の下の鎧下着(図版Va、挿図16、17、18等参照)に見られるような大胆な曲線裁部分はない。三領を通して窺われることは、基盤は当時の小袖にあるようで、ただ鎧下着としての機能に適応させて単純化した感が強い。特に謙信所用と伝えられる白平絹鎧下着(③)にはそれが言え、袖を筒袖に、丈を短く、身幅(前身幅、後身幅ともに)を多少つめた小袖と言えよう(美術研究二二八号、拙稿「伝

上杉謙信所用小袖十二領」―報告二―照合)。形態と同様に地質にも実用面の配慮が心憎いばかりになされていることは二の概要(「上」、美術研究二九一号三二頁)で述べた通りである。実用一点張りの白平絹鎧下着(③)がある一方、(2)の鎧下着のように実用面も充分に考慮さ

挿図16 伝信長所用緞子鎧下着  
a 正面, b 背面, c 部分  
愛知 名古屋城蔵

挿図17 伝信長所用麻鎧下着 a 正面, b 背面, c 部分 愛知 名古屋城蔵

挿図18 伝家康所用葵紋縁飾繡鎧下着 a 正面, b 背面 東京国立博物館蔵

れながら多色型染や紅色も鮮やかなものがあるのは、陣羽織にも窺われたような（美術研究二五九号の拙稿「伝上杉謙信所用陣羽織八領」—報告五—参照）最後を華やかに飾ろうという心理から求められた戦衣としての装飾性であるかも知れない。派手やかなもの、手間のかかったもの、珍しいもの、高価なもの等を鎧下として着込む心意は単なる洒落としても感動的である。(1)の多色型染は前記調査事項でも明らかのように徳川黎明会所蔵の袷に見られる多色型染よりも少くとも十工程位は多く手間がかかっている型染で、糸目糊や伏糊まで型付されており、近世における最古の多色型染として驚異的遺品である。(2)の縮緬は、わが国では最古の縮緬の遺品であるが、地質は徳川黎明会所蔵の袷に用いられている縮緬よりも薄手である。その紅色（図版I）は黄の下染を浸染で行った後、紅の浸染をしている。上杉家伝来の謙信・景勝所用として伝えられる服飾類に見られる紅染の服飾類は、これまでの報告にも屢々取扱ったが、何れも、褪色の著しい紅染のものとしては珍しく鮮やかな色をとどめている。この事象は上杉家の保存が如何に良好な条件下に行われて来たかを物語る一端でもあって、われわれは上杉家伝来の紅染服飾類に接する都度、感謝の念を新たにす心境となるのである。

(4)鎖帷子と(6)鎖頭巾は徹底した護身用の戦衣で、その重量のある着込みを如何に機能的に着装するか、その点に行届いた配慮がなされていることをわれわれは今回の調査で概略察知することを得たが、その機能は当時の実戦で活用しない限り真の優秀性は理解出来ないものと思われる。恐らく驚くべき護身の計算がなされている機能的にも秀抜な戦衣であったであろう。

(5)烏帽子形白綾頭巾は(6)鎖頭巾の上か兜の上に被った装飾性本位の頭巾で興深いものである。鎖帷子、鎖頭巾、烏帽子形白綾頭巾の類は当時のものは勿論、多少時代の下るものも現存せず、極めて珍しい貴重な資料である。

仕立には四領二個に共通して室町・桃山時代の仕立の特徴である鷹場さや技術の幼稚さが見られる。綿入仕立、袷仕立の方法では、すでに報告二、報告四、報告五<sup>註32</sup>で述べた上杉家伝来の小袖や胴服、陣羽織との共通性がこれらにも認められる。

また、これらに用いられている表裂、裏裂の裂地の種類と地質、染と織の技術、文様等は何れも室町・桃山時代の特徴が顕著であると言える。

そして、材料、形態、意匠上からも上杉家伝来の陣羽織の場合と同様（美術研究二五九号の拙稿「伝上杉謙信所用陣羽織八領」—報告五—参照）、戦国時代の武将が用いたにふさわしい実用、装飾両面にすぐれた戦衣である。

従って、これら四領二個の戦衣は、明らかに室町から桃山時代初期にかけての戦衣である。

次に上杉家のものとする検討からはどうかという小袖や帷子、胴服、陣羽織の場合と同様なことが明らかになる。

即ち、意匠の上でも品質の上でも、当時としては恐らく極上の優品が大半であるように思われ、一貫して並々ではない凝り方や配慮、贅沢が行われている。ただ、贅沢や派手さでは胴服や小袖、帷子、陣羽織よりも目立たないのは、具足の下に着込む性格の戦衣がこの四領二個の中の

五点であるから当然のことと考えられる。

小袖や帷子、胴服の場合に、上杉家のものであるという決め手になった竹に雀の紋所が陣羽織の場合と同様これらにもないが、四領二個の裂地、染色、文様、形態、法量、仕立て方、意匠等、前項で述べた調査事項に基いて、同一点、類似点、関連性を辿って照合すると、陣羽織の場合と同様、これら四領二個も、おのずから一連のもの、即ち、室町・桃山時代初期の上杉家の戦衣であることが明白になる。

以上述べてきたように、上杉家伝来の鎧下着・着込み・頭巾頭四領二個は、同じく上杉家伝来の陣羽織八領と共に、今日残存する戦国時代後期の武裝服飾では最古のもので貴重な存在である。それらには、陣羽織の場合と同様、従来の鎧下着の遺品資料には見られなかった古様があたり、多少時代の範囲を広げても同種の戦衣の遺品は他には皆無であったりして、まことに得難い貴重な資料である。更に何れも「うぶ」であり、四領二個がそれぞれに独自の特色を持った逸品揃いである。染織品としても当時としてはそれぞれ最高級の品質のもので、服飾品としても機能、装飾両面に優れた優品である。特に戦衣としての機能の点では現代のわれわれには推測の及ばない優れた点が個々に備っているものと考えられる。こうした染織・服飾両面の優品である戦衣六点が、同じく優品揃いの陣羽織八領と共に保存状態も良好に同一武家に伝えられていたのであるから、染織工芸史上、武裝服飾史上、並びに日本服飾史上、極めて意義の深い重要な資料の発見であったといわなければならない。

(一九七四年二月)

註20 佐々木信三郎著「西陣史」七八頁（工芸志料、日本染織商工史下巻一八頁より）。

21 本稿の「上」、美術研究二九一号三一頁参照。

22 上杉家伝来の謙信・景勝所用と伝えられる服飾類には紅染のものがかなりあるが、何れも紅縮緬鎧下着の表裂・裏裂（共に図版I参照）同様に褪色が極めて少い。

23 後述（一四頁）するように、この染めむらと思われた箇所は実際は摩擦の多かった箇所が紅が剥落し下染の黄が露出しているのであった。

24 紅花餅 七月黄色に開いた紅花は二、三日経つと次第に赤味を帯びてくる。開花して約三日目の花瓣を採取し、よく揉み、むしろに厚さ五センチくらいにして拵げ、上から散水し、日陰に約一昼夜おく。発酵して花瓣は真赤になる。更に、白でついたり或は足で踏んで揉み、柔らかくなった花瓣を径三センチ、厚さ〇・五センチくらいの団子状にし、上からむしろをかぶせて圧搾して平たい団子にする。日向において乾燥したのを紅花餅という。作り方が面倒な上、多年の経験を要するので現在では技術者が激減した（紅花餅を作るには経験が必要でありまた天候に左右され、品質の不均一は逃れることができないので、われわれの研究室では、紅花が黄色から赤色に変化するからくりを研究し、薬品により、わずか三分間で赤変させる方法に成功し、現在ではすべてこの方法によっている。紅花餅に比し紅が鮮明で、かつ紅の量が30%~35%多く、均一原料を量産することが可能である）。

なお、これら原料には、水溶性の黄色素とアルカリ性溶液に可溶性紅色素が共存し、染料や化粧料に供される。（鈴木孝男）

25 縮緬は緯糸に非常にきつい強熱糸が用いてあるので濡れると著しく縮む。それは、縮緬の仕上げは、幅を出し揃えながら棒に巻き取り、次に蒸籠の中に入れて約三十分間蒸気に当て、一夜間そのまま放置して縛止めを行い、乾燥させた後畳むという方法が用いてあるので、その裂が濡れば忽ちにして緯糸の強熱がきつくかかって縮むのである。

26 文丈は織文様の一かえり（One Repeat）の長さを、窠間幅は織文様の一かえりの幅をいう。

27 裂を織る場合に緯糸の打込みがゆるいと緯糸の密度が粗くなり、従って文丈が長くなる。

28 植物性染料を用いて黒、茶系の染色を行う場合、多くタンニン含有する材料を

用い、これに鉄漿を媒染として加えて発色させる。そのため鉄分による裂地の腐蝕が甚だしいのである。

29 裂を接ぎ合わせて円錐形風の形を作るときは、大ていの場合には平縫か返し縫で行う。この大きな針目を見ると仮縫の時などに行うような大針目の平縫か、さもなくばく縫かと思われる。

30 芹の花は確にこの文様に見られるような可憐な五弁花である。形の上での写実性、花の持つ性格など見事に表現しながらこの便化、ただただ驚くほかない。実際の芹の花は梅や桜のような目を奪われるような美しい五弁花ではなく、地味で目立たないごくごく小さな白い花である。その花が沢山集って球状をなし、その球状の塊が更に幾つか集って茎の上部についているのである。よく見なければその一つ一つの花が白い可憐な五弁花であることには気づかない。

31 昭和四年五月三日から六月一日まで名古屋の徳川美術館で開催された「桃山の衣裳と蒔絵展」に出陳されたこの袷について、同美術館の大河内氏もその目録に「琉球の紅型染を思わせる様な鮮明な黄の染料による地染の上に、四枚から五枚の型紙を使用したであろうか、四色ほどで雪輪に根芹模様を小紋風に染め出している。」と解説しておられる。

32 報告二は美術研究二二八号所載の「伝上杉謙信所用小袖十二領」、報告四は美術研究二四二・二四三・二四四号所載の「伝上杉謙信所用胴服八領」、報告五は美術研究二五九号所載の「伝上杉謙信所用陣羽織八領」。

33 上杉神社稽照殿学芸員尾崎周道氏の調査によると、景勝がお守り役の宮島三河守とともに謙信の陣に従ったのは七才とも十才ともいわれ、また初陣は謙信の加賀能登遠征のときで十五才（何れも年令は数え年）といわれている（尾崎周道著「上杉景勝公小伝」―昭和四八年四月上杉神社々務所発行―二頁）とのことである。ここに今回の調査で景勝所用と伝えられる紺麻地鍔繫ぎ矢車文鍔下着(1)、紅縮緬鍔下着(2)の二領は大きさから考察すると十三、四才から十六、七才までぐらいの少年用と見做された。従ってこの二領は、景勝初陣当時の鍔下着の公算が大きくなった。

図版要項

一 紅縮緬鍔下着 部分 (原色刷) 山形 上杉神社蔵

丈 六四cm 衿 四一・五cm 袖巾 一七cm 袖丈 三〇cm

二 a 鎖帷子 山形 上杉神社蔵

b 同 部分 同

丈 八五cm 衿 六八cm 袖巾 約三五cm 袖丈 五四cm

三 a 烏帽子形白綾頭巾 山形 上杉神社蔵

b 同 背面 同

四 a 同 部分 同

頭囲り 七〇cm 高さ 四二cm

b 鎖頭巾 斜め背面 山形 上杉神社蔵

頭囲り 六〇cm 高さ 三四cm

五 a 黄縮緬根芹雪輪小紋袷 東京 徳川黎明会蔵

b 同 部分 同

丈 一五四・五cm 衿 六一cm 袖巾 三四・五cm 袖丈 五〇cm

五 a b 写真提供 徳川黎明会

一一五 神谷榮子「上杉家伝来鍔下着・着込み・頭巾等四領二個」参照

六・七 薬師如来像 同 部分 京都 高田寺蔵

像高 八七cm 台座高 六五cm

八・九 同 台座墨書 (赤外線写真) 同

敷茄子受座八角板裏 外側 天地 五五・五cm 幅 五六・八cm

内側 天地 四二・八cm 幅 四三・五cm

六一九 猪川和子「京都高田寺薬師如来像と藤原實方の歌」参照